

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2024 年 12 月 20 日

No.150



(行發店而并蔵町中府)

THE OLD RACE-COURSE AT FUCHU TOWN MUSASHI.

景ノ場馬舊町中府國藏武

絵葉書「武蔵国府中町旧馬場ノ景」

もくじ

- 1-2 国天然記念物指定 100 年 馬場大門のケヤキ並木
その③…ケヤキ並木を写した古い絵葉書
- 3 展示会案内
市制施行 70 周年記念 特別展
古代たまの寺とみほとけ
- 4-5 NOTE
古写真から見る府中の葬儀
- 6 series 祈願と御利益
③仏面を描いた土器の使途は？
- 7 最近の発掘調査
平安時代の帯につける石鏝を発見
- 8 近代プラネタリウム誕生 100 周年！
プラネタリウムについて知ろう！
⑦ 100 年でプラネタリウムはどう変わった？

国天然記念物指定 100 年

馬場大門のケヤキ並木

おおくにたまじんじや
大國魂神社の参道であるケヤキ並木は、1924 年（大正 13）に国の天然記念物に指定されました。今年
てんねん き ねんぶつ
はちょうど 100 周年です。この機会に、博物館では
12 月から 1 月にかけて展示会を開催し、本誌でも
ケヤキ並木にまつわる話題を 4 回シリーズでお届け
します。

その③…ケヤキ並木を写した古い絵葉書

ケヤキ並木を写した古い絵葉書は、これまでに 9 種類を確認しています。これはそのうちの 1 枚で、天然記念物に指定された 1924 年をさかのぼる可能性の高いものです。

馬場大門のケヤキ並木

その③…ケヤキ並木を写した 古い絵葉書

1900 年（明治 33）、私製絵葉書の使用が認められると、風景絵葉書はもとより美人絵葉書、そして日露戦争の記念絵葉書の発行が盛んになりました。

このうち風景絵葉書は、全国的な郷土意識の高揚と相まって大きなブームになったのでしょう。欧米の影響を受けて、日本でも文化財保存の意識が高まりをみせはじめ、1898 年には〈古社寺保存法〉が制定されて建造物や美術工芸品の保存が本格化しました。さらに、急速な近代化により、各地に鉄道や工場が建設されたことが背景となって、土地に結びついた文化財の保存を目的とした〈史蹟名勝天然記念物保存法〉が 1919 年（大正 8）に制定されます。これら法整備が全国各地で郷土意識の高揚をもたらしたのでした。

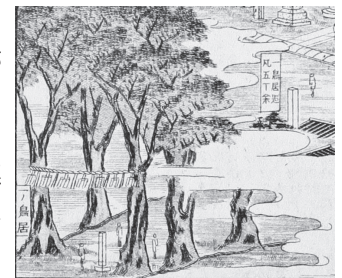
当時の府中町（府中町は 1954 年に西府村・多磨村と合併して府中市）内では、1914 年に「分倍河原古戦場の標識」、1923 年に「八雲神社板碑説明板」が分梅の青年会によって設置されています。ケヤキ並木でも、大國魂神社が 1916 年に南端の御神木の根元に説明板を立てたことが確認できます。また、同年には府中町青年会が『武蔵国府名蹟誌』を刊行していて、ケヤキ並木を含む府中町付近の名所・旧跡を紹介しています。ケヤキ並木をはじめとする、名所・旧跡に対する啓蒙活動が盛んにおこなわれたことが分かります。

さて、絵葉書に戻りましょう。府中では、大國魂神社、高安寺、分倍河原古戦場などの風景絵葉書が発行されています。このうち大國魂神社に関しては、社殿や神輿、境内とともにケヤキ並木など複数枚を一組としたものが発行されています。



大國魂神社之図

左下隅に、ケヤキ並木が長さを縮めて描かれている。「一ノ鳥居」の位置にある北端のケヤキに注連縄が張られている。右はその拡大。（本館蔵）



発行年を特定することはできませんが、明治末期から昭和初期まで、大國魂神社や福井商店、渡辺印刷所などから数多く発行、販売されています。

本題のケヤキ並木の絵葉書は、現在のところ 9 種類を確認しています。北端近くから南を望んだものが 5 種、南端にある御神木を写したものが 2 種などです。ケヤキ並木でもひときわ目立つ巨木がそびえていたから、好まれた構図なのでしょう。

表紙の 1 枚は、「官幣小社大國魂神社」の標柱が立っています。行き交う人々はまばらで、並木の外には家屋も見えません。国の天然記念物に指定されると、社名標柱の近くに指定範囲を示す境界標が設置されますが、それが無いことからすると、指定よりも前の撮影と判断できます。ケヤキ並木の絵葉書のなかでも古手の 1 枚です。

ところで、こうした絵葉書が発行される頃にはすでに失われているのですが、並木の北端にはかつて一の鳥居がありました。江戸時代後期の絵図などには描かれています。この鳥居がいつ失われたのかははっきりしませんが、1901 年に大國魂神社が発行した銅版画（上写真）には、両側の巨木に注連縄が張られた様子が描かれています。

（深澤靖幸）

市制施行 70 周年記念 特別展

展示会案内

古代 たまの寺とみほとけ

2025. 1 / 25 (土) ~ 3 / 9 (日)

会場：本館 1 階 特別展示室



今年度最後の展示会は、古代「たま」に焦点をあて、仏教が広まっていった過程を探ります。対象となる「たま」とは武蔵国多磨郡のことで、現在の三多摩地域と世田谷区の一部などに相当する東西に長いエリアです。当時は主に「多磨」「多麻」の表記が用いられていました。「たま」では、武蔵国分寺や武蔵国府といった広域遺跡をはじめ、多摩丘陵や多摩川沿いの低地まで、幅広く発掘調査が及んでいます。今回はこれらの成果をふまえ、出土資料を中心に展示します。

はじめに注目するのは「多磨寺」です。府中の京所（大國魂神社東方）では、「多寺」「多磨寺」の文字がある古代の瓦が見つかっていて、郡名「たま」が付された寺院の存在が判明しています。7世紀末～8世紀初頭に、多磨郡の郡司（役人）層によって建立され、「たま」でいち早く仏教受容・普及の場になったと考えられます。右上写真の軒先瓦は多磨寺に貢かれた瓦で、朝鮮半島・新羅の系統をひく逸品です。

そして、「たま」と仏教との関わりを探るうえで、もうひとつ重要な存在が武蔵国分寺です。741年（天平13）、聖武天皇によって発出され

た「国分寺建立の詔」に基づいて造られました。

七重塔から着手された武蔵国分寺の造営には、相当の年数と労力が費やされました。瓦屋根に朱塗り柱の荘厳な建物が並ぶ光景は、当時の人びとにとって衝撃



武蔵国分寺七重塔の水煙片
塔頂部の相輪の一部。銅製。
（日本考古学協会蔵／武蔵
国分寺跡資料館提供）

的なものだったでしょう。本展では、塔の水煙片や金銅製の飾り金具など、国分寺ならではの出土資料を展示します。

さらに興味深いのは、古代の仏教信仰の場は国分寺や多磨寺のような伽藍を備えた寺院ばかりではなかったことです。仏教の広まりにともない、集落に掘立柱の小さな仏堂が建てられたり、山林に修行の場が設けられたりしました。「たま」各所で、塔のミニチュアである瓦塔（やきもの）や、仏鉢の形をした土器などが見つかっており、これらもまた僧侶の活発な往来や、庶民への仏教の広まりをうかがわせてくれます。

また、仏教との関わりで奈良時代に開始されたと考えられる火葬、末法思想のもとに12世紀から始まった経塚の造営についても、「たま」の遺跡と出土資料をもとに紹介します。

「たま」に伝わるみほとけとして、古刹である深大寺（調布市）の白鳳仏（御身代わり）も展示しますので、じっくりご観覧いただければ幸いです。（石澤茉衣子）



武蔵国府関連遺跡出土の仏鉢形緑釉陶器
緑釉陶器の仏鉢は非常に珍しい。仏前に供えたものだろうか。復元口径約27cm。（府中市片町出土／府中市教育委員会蔵）



写真 1：葬列を組んで移動する様子

▼ アルバムにあった葬儀の写真

小野宮（現 住吉町）の旧家である内藤治左衛門家での資料調査の際、古いアルバムを拝見しました。そこには僧侶による読経から墓地への埋葬に至る葬儀の様子が 20 枚以上にわたって残されていました。

この葬儀に故人の親族として参列した M さんに話を伺うと、写真は 1961 年（昭和 36）頃のものだと分かりました。今回はこのうちの 3 枚を通して、当時行われていた葬儀の様子をみていきます。

▼ 故人を送る葬列

現在では、人が亡くなると斎場で葬儀を行い、火葬するといった流れが多くなりました。しかし、かつては自宅で行い、墓地まで遺体を運んで埋葬していました。

遺体を出棺する際に組む列を葬列（そうれつ）といいます。『府中市史 下巻』（1974 年刊、以下市史）には人見（現 若松町）で行われていた葬列が紹介されています。それによると、献花（けんか）が先頭（せんとう）を行き、鉦（かね）たたき、僧侶（そうりょ）、位牌（いはい）を持った喪主（さんしゅ）、三方（さんぽう）を持った近親者（きんしやく）、棺（ひつぎ）の順で並びました。その後ろにほ

かの近親者や、近所の家で組織された葬儀の手伝いをする葬式組合、念仏講中の講員といった近親者以外が続いたとあります。棺の担ぎ手は葬式組合が務め、献花の持ち手は雇っていたようです。

上の写真 1 は葬列の様子です。M さんによると、自宅から内藤治左衛門家の墓がある正光院（住吉町）に移動する際、列を組んで歩いたという記憶があるので、その時の様子と思われます。葬列の先に花を輪の形に大きく組んだ献花（花輪）を持つ人が見えます。M さんによると、その役割は分家が担ったそうです。

▼ 境内で回る人々と遺骨

写真 2 は正光院の境内で撮られた写真です。ほかの写真も合わせて考えると、花輪を除いた葬列が本堂の前にある宝塔（ほうとう）を中心にして周回している様子だと思われます。

市史によれば、人見では「葬列は家をする時に庭を左まわりに二廻りしてでる」とあり、新宿（現宮町）では「葬列はまずお寺について寺の庭を左まわりに三まわりまわって本堂にあがり、最後の別れをする」とあります。しかし、写真 2 は本堂の前を右まわりで回っています。どこでどのよ



写真 2：正光院の境内で回る葬列

うに回るのかは、同じ府中でも地域や寺院の宗派によって差異があるのかもしれませんが。

写真 2 に写る人物をみると、左から三方を持つ女性、位牌を持つ男性、肩から布を下げて白い包みを抱える男性が確認できます。包みはその見た目から遺骨が入っていると思われます。

ここで注目したいのは、棺ではなく遺骨が写っている点です。そこからこの葬儀が土葬ではなく、火葬で行われたことが分かります。

かつて府中で行われていた葬儀はほとんど土葬でした。しかし、府中市域では 1931 年に火葬可能な斎場（日華斎場）が完成しており、1961 年 9 月には都の条例により原則土葬が禁止となっています。内藤治左衛門家の葬儀はちょうどこの移行期にあたっています。

▼ 埋葬方法の変化

写真 3 の右下には、ほかの参列者よりも低い位置にいる男性が見えます。また、その周囲には掘り返されたような土があることから、男性は穴に入っていると考えられます。この穴は墓穴だと思われます。

穴に入っている男性の腕で隠れていますが、中央の屈んだ男性が写真 2 に写る白い包みを持っていることが辛うじて確認できます。包みに入っている遺骨を埋葬しようとしているのでしょう。

現在では、遺骨は墓石に設けたカロートという納骨室に納めるのが一般的です。そのようなカロートは明治時代に登場します。関東大震災を契機に当時の東京市がカロートを設けた墓石を推奨し、以後東京周辺に造られた墓地に広がっていきます。1923 年（大正 12）に東京市共葬多磨墓地として開園した多磨霊園でも、1942 年に



写真 3：遺骨を埋葬する様子

は多くの墓石がカロートを設けたものになっていました。

多磨霊園以外にある府中の墓がいつ頃からカロートを設けたものになったのかは、よく分かっていません。とはいえ、カロートを設けていれば石のフタがあり、穴を掘る必要はありません。写真の様子から少なくとも 1961 年頃の内藤治左衛門家の墓石は、カロートを設けていなかったといえそうです。

▼ 葬儀の移り変わり

1960 年代の葬儀についてはまだ体験者から直接お話を伺うことができますが、葬列から埋葬に至る流れを撮影した写真は貴重です。そこから現在では見かけることがなくなった葬儀の様子が窺えました。

今回取り上げた写真から、遺体の埋葬方法が火葬になっても、葬儀の仕方はすぐには変わらず、それまで行ってきた慣習を踏襲していたといえそうです。

しかし、葬儀の場が自宅から斎場に移ると、遺体を移動させるために自動車を使うようになります。すると写真 1 のような立派な葬列を路上で組むこともなくなりました。また、カロートが普及すると墓穴を掘る必要もなくなりました。

葬儀は時代のニーズに合わせて、いまでも変化しています。現在行われている葬儀の様子を撮影しておけば、将来、今回紹介した写真のように葬儀の移り変わりをたどることができる貴重な記録になるかもしれません。

（写真所蔵 内藤蓉子氏）



③ 仏面を描いた土器の用途は？

古代武蔵国府跡の発掘調査では様々な遺物が出土します。そのなかからまだ1例しかない、墨で仏面が描かれた土器（右写真）を紹介します。

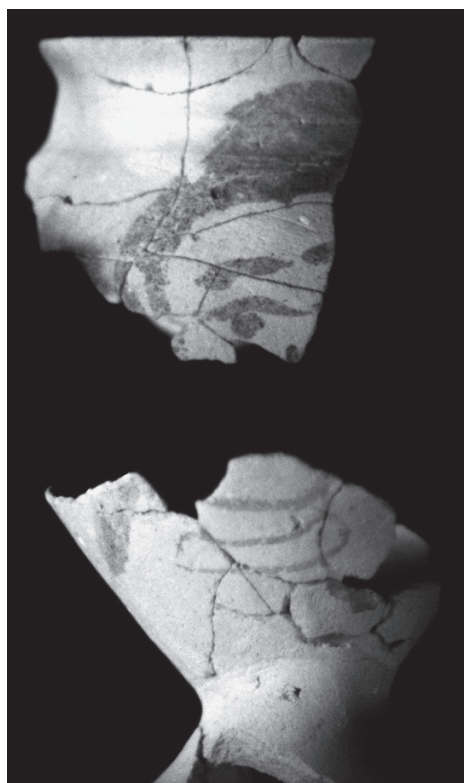
出土地点は、府中市南側の低地に位置する東京競馬場構内（日吉町）で、武蔵国衙（国府の官庁街）跡の南東にあたる場所です。この土器は9世紀後半から10世紀前半の間に製作時期が求められる土師器の台付甕です。

甕の胴部中央が見つかっていないため全容はわかりませんが、これまで出土した破片には以下のとおり仏面の特徴が認められます。まず上部には、如来の肉髻を表した頭頂部の出っ張りが描かれています。つづいて下部に注目すると、大きく垂れた右の耳たぶ、首には三道を表現した3本線が見えます。

この土器が出土したのは蛇行する溝状の遺構で、土の堆積状況や遺物の出土状況から古代の河道跡と判断されています。早ければ8世紀後半には水流が生じ、11世紀前半には機能を終えたようです。仏面墨書土器以外にも、合わせ口にした土器や、まだ使えるはずの完形の土器が出土していることから、ここに水流を利用した祭祀の場があったと考えられています。

この祭祀の主体者は現段階ではわかりませんが、国府内なので中枢機関としての国衙が主導した可能性があるほか、河道が機能していた時期にちょうど周辺の竪穴建物数がピークを迎えていることから、集落によるものとも考えられます。

ところで、古代には土器の底面や側面に墨で文字や記号を書く風習がありました。都周辺では、人面風のものが描かれた土器が水場遺構からまともって出土することがあります。これらのなかには、疫病神や鬼神の顔を描いたと見られる土器があり、人びとの穢れを吹き込んで水に流す、つまりは外に追い出す祓をおこなったと考えられています。東国では、下総国府（千葉県市川市）の東辺にあたる川の旧流路から、仏を描いた土器を含む祭祀に関連した遺物がまともって出土し



仏面が描かれた土師器甕（赤外線写真）
府中市教育委員会蔵

ています。

このような事例をふまえ、武蔵国府の河道跡から出土した仏面墨書土器には、どのような祈願とご利益が期待されたと考えられるでしょうか。

ひとつの仮説として、仏教の「悔過」という法会を参考にしたいと思います。悔過は、仏に対して自らの罪や過ちを懺悔し、災いをはらい、それによって安泰・平穏といった現世利益を得ることを目的としたものです。例えば、この仏面墨書土器に罪過をうつし、それを河道に流すことで身を清浄にしてご利益を得ようとしたとは考えられないでしょうか。

また、この河道が、国府とその外、あるいは集落とその外との境であったという見方をすれば、領域内を守る「禦ぎ」として仏面墨書土器を用いたとも考えられるかもしれません。

上記の推測に基づけば、いずれにしても現世利益と結びついた用途が想定できますが、みなさんはどのように考えますか？ （石澤茉衣子）

平安時代の帯につける石鑄を発見

宮町3丁目

府中市ふるさと文化財課

佐藤 ななみ

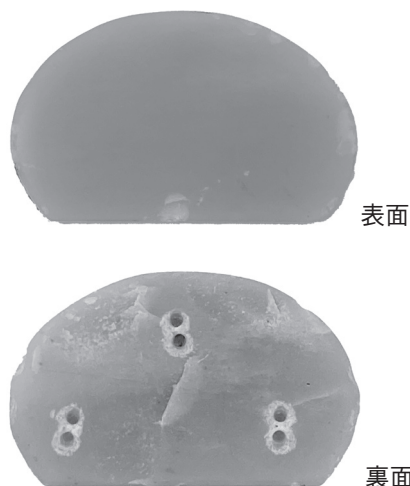
今年の大河ドラマは平安時代を舞台にしていますが、イラストのように、平安貴族が、四角やかまぼこ形の石が並んだ帯を腰に巻いている姿をご覧になった方もいらっしゃるのではないでしょうか。実はこのような帯は正倉院宝物として現存する他、装飾具が各地の遺跡から発見されています。8世紀初頭に、唐の服制を模して貴族・官人の服装が規定されるようになり、奈良時代では金属製、平安時代には石製の飾りが主流になりました。帯は「腰帯」や「鑄帯」、飾りは「鑄」、「鑄具」などと呼ばれ、石製のものは「石帯」や「石鑄」とも言われます。「鑄」には、主に四角形の「巡方」と、かまぼこ形の「丸靱」があり、今回、ご紹介するのは石製の「丸靱」です。

出土したのは、大國魂神社から東に約100mの場所で、奈良・平安時代における国府の中心域になります。国府とは、古代の役所の所在地のことで、出土地の近隣は、国衙と呼ばれる役所の施設が広がるエリアだったとみられます。

この地点の調査では、奈良・平安時代の竪穴状遺構や用途不明の土坑（人が掘った穴）が検出されていて、この「丸靱」は中世以降に掘られた土坑に混入したものとみられます。まるで青磁と見間違ふほどのきれいな緑灰色の石材を使用しており、表面は丹念に磨かれ、美しい光沢を持っています。裏側には帯に括り付けるための潜り穴が3か所に開けられ、当時の技術の高さがうかがえます。このような貴重な石を使った帯は、身分により使用が制限されていました。

国府のおかれた府中ではこれまでに200点以上の「鑄」が発見されており、黒色や濃緑色など様々な石材が確認されていますが、緑灰色の石材を使用したものは多くはありません。類似する「丸靱」が、美好町の10世紀前後の遺構から出土しており、使用された年代が近いのかもしれませんが。

今後は科学分析による石材同定を行い、遺跡の調査成果の刊行に向けた作業を進めていく予定です。



※イメージ図

近代プラネタリウム誕生 100 周年！

プラネタリウムについて知ろう！



⑦ 100 年でプラネタリウムはどう変わった？

この 100 年で様々なものが発展してきました。プラネタリウム投映機はどのように変わったのでしょうか？ 今回は、プラネタリウムの進化に注目していきましょう。

開発されたころのプラネタリウムでできることは、「地球から見た星空を再現する」ことでした。1 日の星空の時間変化である“日周運動”や 1 年の星空の変化である“年周運動”、さらには緯度変化による星空の変化も再現することで、世界中のどの時間の星空も再現することができました。1960 年代までは、このようなプラネタリウムの機能やスライドを使用して、星や宇宙について解説していました。ただ、プラネタリウムの操作は全て手動です。時刻を動かすためのダイヤルを回したり、星の明るさを調整したり星座絵を映したりしながら、マイクを片手に解説を行っており、投映者が一人で様々な操作をする必要がありました。このように操作が複雑だったプラネタリウムは、その後コンピューターの発展に伴い、劇的に進化していくのです。

1970 年代に開発されたプラネタリウムは、コンピュータープログラムを用いることで、操作を自動的に行うことができるようになりました。これにより、手動操作ではできないような演出をすることが可能となったのです。

1980 年代には、コンピューターでより高度な計算ができるようになりました。これにより、これまでのプラネタリウムでは、地球から見た星空しか再現できませんでしたが、宇宙から見た惑星の動きや各惑星・衛星から見た星空を再現できるようになったのです。ほかの惑星から見た星空を再現するためには、恒星投映機や惑星投映機を様々な方向に動かす必要があります。このため、このころに開発されるプラネタリウムから、惑星投映機がそれぞれで制御

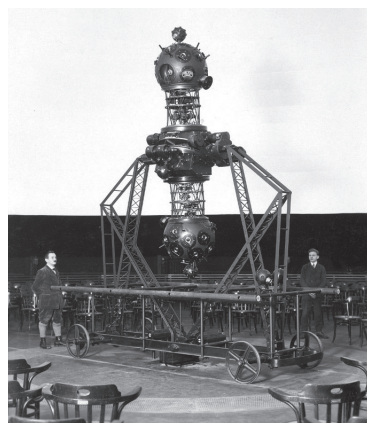
できるように切り離され、恒星投映機自体の形も様々な方向に回転できるように、段々と球状に近づいています。

1990 年代には、映像技術の発達に伴い、「デジタルプラネタリウム」も誕生します。プロジェクターを用いて、ドーム全体に星空や宇宙空間を再現するのはもちろん、様々な 3DCG 映像も映すことができるようになりました。これにより、プラネタリウムで、多彩な演出を行うことができるようになったのです。

2000 年代に入ってからでは、これまでの光学式プラネタリウムとデジタルプラネタリウムを融合した「ハイブリット・プラネタリウム」が開発され、光学式プラネタリウムでよりリアルな星空を投映できるだけでなく、デジタルプラネタリウムの機能を利用して、宇宙空間を移動するなど様々な演出が可能になりました。

このように 100 年間でプラネタリウムは、その時代の最新技術を取り入れて進化してきました。現在、当館に設置されているプラネタリウムはハイブリット・プラネタリウムである「ケイロンⅢ・ハイブリット」です。約 1 億個の星を投映することができ、天の川の一つ一つの星まで再現しています。映像も 4K プロジェクターを 4 台用いて、高精細な映像をより明るくお楽しみいただけます。様々な番組を用意しておりますので、ぜひプラネタリウムを見にお越しください。

(村井太一)



初めて世界中の星空を投映することができるようになった投映機・ツァイスⅡ型 ©Carl Zeiss Archive